メディア教育開発センター創立20周年記念シンポジウム

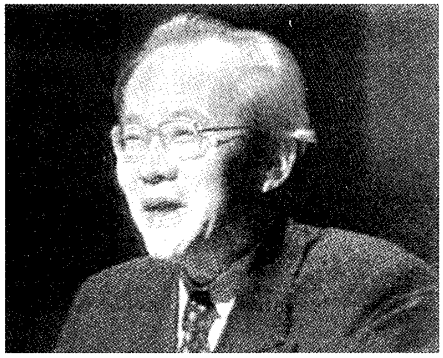
永　岡　慶　三
メディア教育開発センター

「メディア教育開発センター創立20周年記念シンポジウム」を開催いたします。私、メディア教育開発センター研究開発部の永岡と申します。本日の進行、ならびに午後のパネルディスカッションの司会をとらさせていただきます。どうぞ宜しくお願いいたします。早速でございますけれども、メディア教育開発センター所長、坂元昂より、本シンポジウムの開催のご挨拶、ならびにこのセンターの20年間の経緯についてお話申し上げます。

1．開会挨拶

放送教育開発センターの20年

坂　元　　昂
メディア教育開発センター所長（前放送教育開発センター所長）



坂　本　　昂
メディア教育開発センター所長

皆さん、お早うございます。全国でSCSを通してご参加してくださっていらっしゃる先生方、会場の皆さん方、お忙しい中ご参加下さいましてありがとうございました。私も、「メディア教育開発センター20周年記念」という字を見まして、あれっと思ったわけですが、実は、メディア教育開発センターが２年前に誕生いたします前身の、放送教育開発センターができましてから20周年でございます。20周年に関しまして、いろいろな行事を考えてやっているんでございますが、いわゆる記念式典というのは来年の春ぐらい、今年の第一次の補正予算でCAVEといいますか、バーチャル・スペースの立派な装置をつけていただきました。上下・前後・左右の六面全体が映像になる、その中に入るとバーチャルな空間ができるという、すごい装置でございまして、それの開所記念と合わせて、20周年の記念の式典をということを考えております。今日は学術的なシンポジウムということで、放送教育開発センターの20年の歴史をふまえ、それから、新しく誕生いたしましたメディア教育開発センターの研究の未来を見据えるような形のシンポジウムを企画いたしたわけでございます。

1．創　　生

私どもの前身であります放送教育開発センターができるきっかけになりましたのは、この「映像放送、及びFM放送による教育専門放送の在り方について」という社会教育審議会での諮問に対する答申で、昭和44年３月になされました。今日、ここにお見え下さっております、センターが出来ます時の文部次官、木田先生もこれにお関わりなさっていたのですが、これがきっかけで、この答申でFMとUHFを教育専門局に開放するぞということについての審議がありまして、そこで大学の教育放送を専門とする放送局を作ろうという答申が出ました。そこから放送大学を作るという、いろいろな委員会が開かれていたわけでございます。今日、お見え下さっております木田先生、それから現放送大学の理事長の井上先生あたりが若い頃随分お力添えを下さったわけでございます。そうしまして、我がセンターが誕生するわけでございますが、このセンターの誕生の前に放送大学を日本の国として作りたいと。機会がありましたら、また後ほど木田先生に裏話などをお聞かせいただければありがたいと思っております。東京工業大学というところに教育工学開発センターがある。そこへ、放送大学要員である二人の教授と、それから現在東京工大で社会理工学研究科長をしておられる清水先生が助教授として加わるという形の陣容で、東京工大の教育工学開発センターと放送大学の要員である教授というものが同時にスタートいたしまして、放送大学を盛り上げるための準備をしていたということがございました。それから後、放送大学を作るぞということで、政府が大変ご努力をなさっておりましたけれども、いろいろな経緯がありまして、まず放送大学の創立を準備する国立の機関としての我がセンターを作ろうではないかという話になったわけでございます。それじゃ、ちょっとビデオをお願い申し上げます。（ビデオ上映）

2．白表紙時代

こういうような経緯でこの建物ができたわけでございますが、その入り口にありますような模様の意味を知っている方というのは、今は大変少ないのではないかと思いまして、見ていただきました。何かやっぱり、意味があるようでございます。こうして、私どもが申しております研究の立場からいいますと、白表紙時代というんです。といいますのは、こういう白表紙の報告書を中心にして出していた時代が、初代の藤田センター所長、それから放送大学学園が私どものセンターから３年のちに誕生いたしまして、藤田所長がそちらの理事長にお移りになりまして、その間暫く、半年ばかり空席がございますが、その空席にただ一人の専任教授でいらっしゃった田中正吾先生が所長代行としてお就きになりまして、それから更に暫くたちまして、56年からでしょうか、天城先生が二代目の所長におなりになったわけです。その頃、研究活動としては、白表紙の報告書がいくつか出たわけでございます。ちょっと場所の関係がありまして、中身をご覧いただけないんですけれども、このような報告書がいくつか出ております（図１）。

大きな仕事としては、放送大学の準備を全員が集中してやっておりました。大学放送の実験番組、大学放送教育実験番組が民放で作られております。それをセンターができる前は短波放送を主として評価研究していたんですけれども、センターができましてからは、センターがそれぞれの番組についてのアンケート調査をするということで、一つ一つの番組がどのように受け取られたか、効果があったと思われていたか等々の調査を積み上げてきたわけでございます。

図1

それから、私ども、私自身もお手伝いをその頃からしているわけでございますが、通信指導の問題といいまして、例えば、近代西洋経済史であるとか、運動と体力、それから文系の工学的人間学、生命の科学史などというものに対しても、コンピュータ化をして通信指導をするということから、多肢選択の問題を生命の科学史、国際政治、あらゆる科目について先生方と協力して、私どもの評価の専門家、後ほど、立教大学の教授になられた池田央先生のお助けなどもいただきまして、すべての科目についての通信問題と評価問題をコンピュータ化できるような形のものにして実験をしていたわけでございます。そういう準備もしておりましたし、学習センターでの指導法をどうしたらいいかというような研究をしたり致しておりました。それから、番組評価アンケートの調査でございますが、これは昭和56年の事態でございます。また、例えば、歌舞伎の起源、歌舞伎が観客の風俗に与えた影響等々、書いてありまして、これを見て下さった視聴者にアンケートを出して、一回ごとに、面白かったとか、分かったとか、役に立つと思ったとか、というのを調べました。これが後にお見せいたしますコンピュータでグラフを映像と重ねて出す研究に発展をしていくわけでございます。こうして放送大学の実験番組をより良くするための評価の研究、それから放送大学が始まる時に、評価だとか、スタディー・センターだとかで上手に大学が運営できるようにするための研究を積み上げてきております。

もう一つ大きな仕事は、放送大学が全国化することを考えまして、地方の方々に大学放送に馴染んでもらおうということで、民間放送に文部省が依頼をして、大学放送番組を、公開放送の番組でございますが、これを作っていたわけでございます。センターができましてから、セ

ンターの仕事になりまして、最初は東北大、金沢大で、もう一つ広島大でございますね。その三大学で始まりまして、その次の55年ぐらいになりましてから、大阪大学、熊本大学が加わって、現在、ブロック制というふうに、大変大きく発展する、大学公開講座に関する実験がございます。これにつきまして、私どもの方でレポートをまとめました。私どもと申しましても、専任教授、当初は専任一人でございます。あと、併任が三人でございます。その一人は私でございまして、後に客員になりましたけれども。客員教授が二人と、池田先生と私と、それにその当時大学院生でありましたか、浜野助教授が研究員としてこの論文を書いたというような経緯でございます。こうした研究を積み重ねておりまして、最初の研究レポートがこれでございます。昭和55年度に「大学放送教育方法の研究」という研究報告が出ました。今日、紀要に発展する一番最初のものでございます。残念ながらといいますか、研究論文、たった一つでございまして、前書きと、私が、「世界におけるディスタンス・ティーチングの動向－大学教育を中心に－と書いたのがたった一つの論文でございます。後は、研究会の目的とかが書いてある。これがはしりでございます。ただ次の年になりまして、天城先生が所長になられました時代には、国際化をふまえて、英語の論文が三点ほど加わって、急激に国際化になってきているということをご報告させていただきたいと存じます。昭和57年頃には、「大学放送教育学習方法研究会」というのがございまして、それの報告書、今でいいます共同研究にあたるんだと思います。そういうものがスタートしておりますし、それから似たようなことで、57年度でございますが、大学放送教育番組の適性化に関する調査研究会の報告書が出されております。もう一つだけ、白表紙時代の作業として付け加えさせていただきますと、ここに持ってきておりますのは、第一回の大学放送教育シンポジウムの実施報告書でございます。今日ここに20周年記念でやっておりますシンポジウムの第一回目のものがこういう形で開かれておりまして、最初から放送大学の設立にご協力を賜っておりました大田次郎先生や、それから二番目の専任教授になられましたNHKから来られた寺脇信夫先生、この当時まだ客員教授でいらっしゃいますね。そういう報告が出て参りました。これが白表紙時代でございました。

3．MME時代

次にMME時代といいますか、マルチメディア・エデュケーション・ノートというもので、研究が集約される時代が参ります。それではビデオの方を宜しくお願いいたします。（ビデオ上映）というようなテーマで研究が進んでいたわけでございます。この時代のいくつかの研究をご紹介申し上げます。既に、現在行われているものの先取りが随分なされているのに改めて驚いております。10年から、10数年前でございますが、非常に、当時の研究者、天城所長をはじめ皆さんの先見の明があったんじゃないかと思っております。最初にご覧いただきますのは、これは木田先生がよく引用して下さるんですが、柳川先生という、東京大学の宗教学の、今、お亡くなりになりましたんですが、先生がいらして、その先生の講義を六つの違ったタイプで作っていただいた。一つの教室の授業をそのまま録画するものと、もう一つはスタジオで先生がしゃべられるもの、それから、さらに、ドキュメンタリー風にして先生自身が解説をされるもの、あるいはドキュメンタリー風にして、プロの、久米明さんだろうと思いますが、解説をされるものというふうな六つの番組を作りまして、先程ご覧いただいたようなシーンごとの、

「分かった」、「分からない」　あるいは、視聴者に、日本女子大だと思いますが、視聴者にスイッチを持たせまして、「分かった」、「面白い」と、「面白くない」というボタンを押させて、それをだぶらせて、うわーっと、こう、示すようなものでございます。一番上に出ているのが、確か、「分かった」、次が「分からない」、三番目が「面白い」、その次が「面白くない」ですから、高い方がより面白いということでございます。そのグラフの動きをちょっとご覧いただきたいと思います。それでは、ビデオお願いいたします。（ビデオ上映）すごい魅力的な先生がお話になっていてさえ、面白さというものは落ちてしまう。大学の教育には面白さはいらないんじゃないかというご意見もあろうかと思いますが、やはり生涯学習というか、一般の方々が学習される放送大学の番組というのは、ある程度の面白さがあっていいんじゃないか。ということは、私どもは、比較的カーブが落ちたところでずーっと勝負をし続けて来たんじゃないかと。それで、本当にいい教育といいますか、視聴者が食いついてくれる講義としていいかどうかという反省をしなきゃならないという気がいたします。先程のグラフ、もう一度出していただけますか。三つのタイプのグラフ、ご覧いただいたのが一番右のスタジオでございます。分かりやすさは結構いいんです。ただ、迫力がちょっと落ちます。

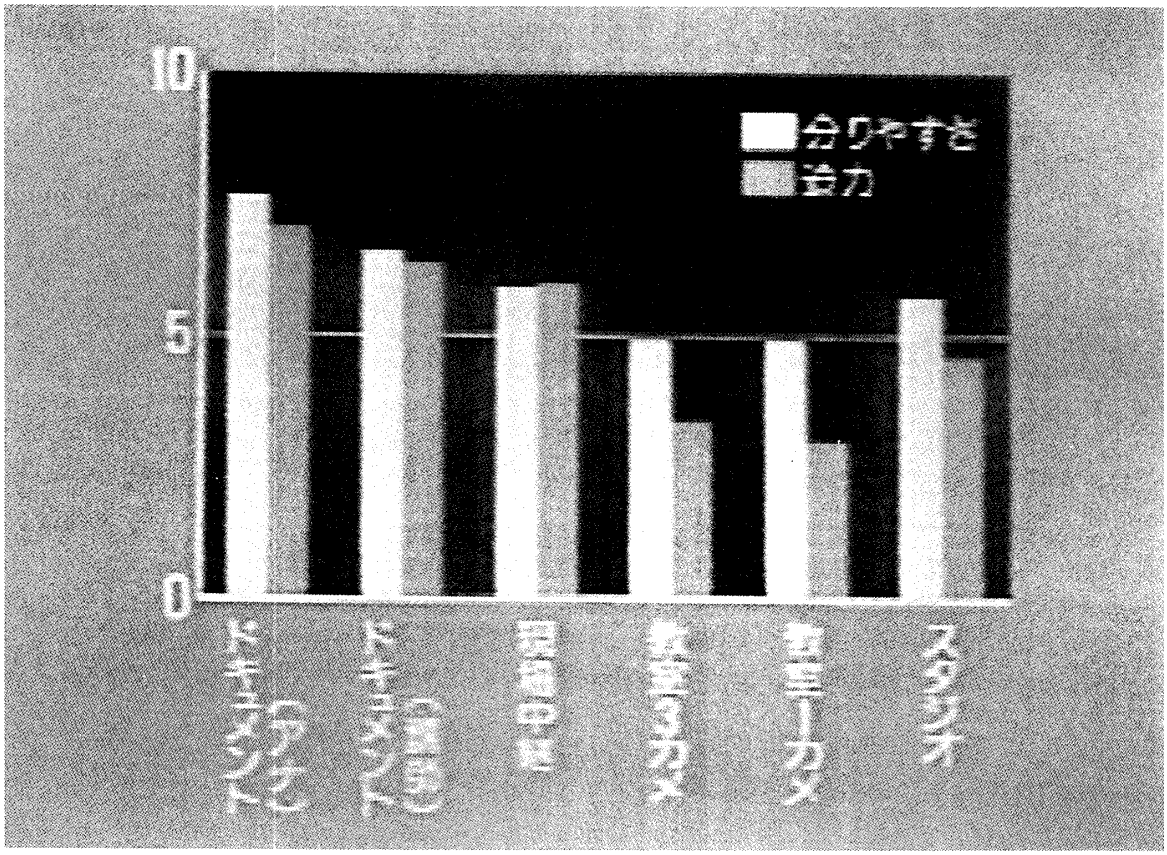


図2

それから、最初のものが教室の１カメですから、ぐーっと、迫力は落ちております。一番左の方が、“ドキュメント：アナウンサー”というのが非常に分かりやすいし、迫力もある。“ドキュメント：講師ご自身”というのもいいし、講師が現場で中継されるのも結構いいと。こう

いうものを見まして、放送大学の番組制作に役立てていただければありがたいなと思っていた。そういう研究をしていたわけであります。それじゃ、次にお願いいたします。（ビデオ上映）

コンピュータの文字がまだカタカナ時代でございますから、随分昔、10数年前です。10数年前に今のような遠隔学習の実験等々を始めていたというこの先駆性をお誉めいただければ、私共ではなく先輩を誉めていただければ大変有り難いと思います。それでは次を見ていただきますと、現在も続けておりますけれども、装置が昔ですので、かなりいかついものを使って相当先端的な研究がされていたという例でございます。（ビデオ上映）とういような研究が進んでおりまして、今のアイカメラですが、今では動きながら撮れるというような装置が数日前に導入されまして、この研究は、また発展していくことになっております。先程ご紹介しました、大学公開講座で10周年記念にコンクールをいたしました。コンテストというんでしょうか。そこで文部大臣賞を獲得されました新潟大学の放送の例をちょっとご覧いただきたいと思います。（ビデオ上映）はい、ありがとうございました。というような形の研究が進みましたのが、ちょうど10年ぐらい前までのことでございます。

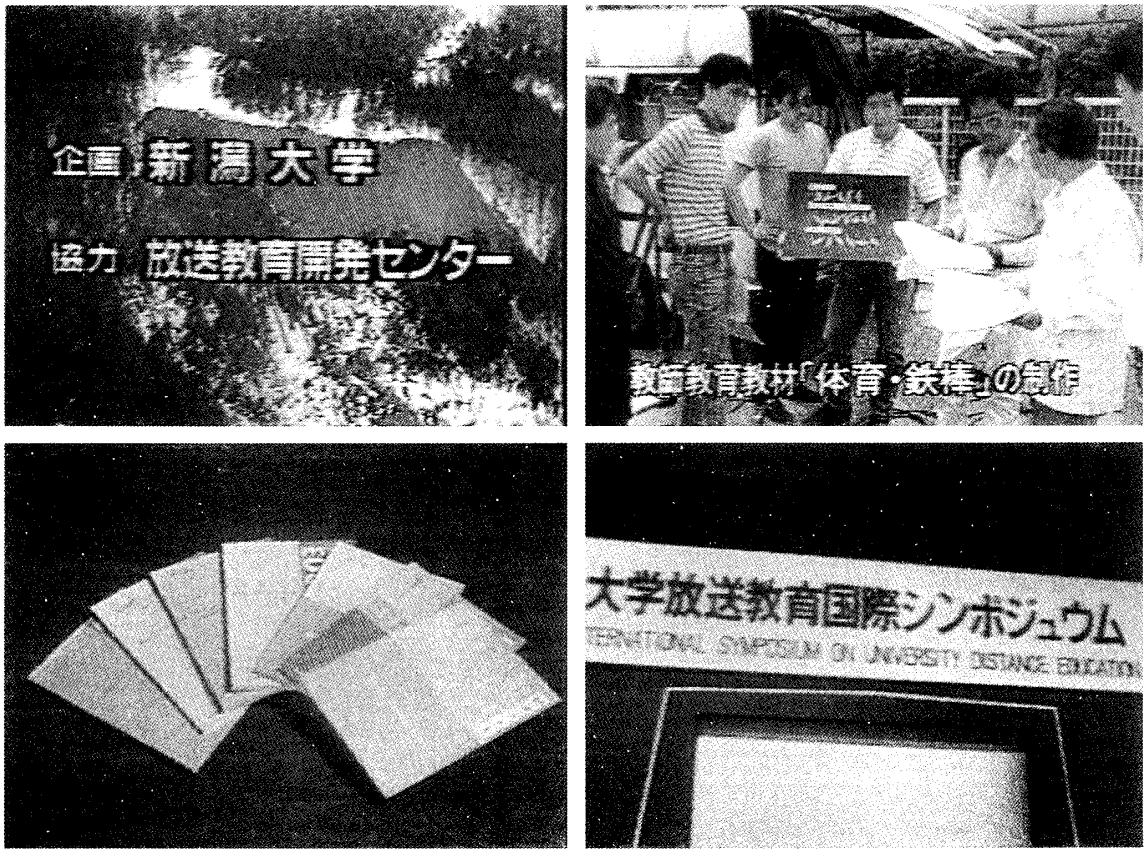


図3

この中で、新潟大学の例ですけれども、非常に表現の手段がすばらしいということと、先生のお話になる説得力のすばらしさですね、そういうもので文部大臣賞をお取りになったわけですけれども。あと、共同自主制作の共同利用機関としての、施設と技術のノウハウを提供するというような作業。それから、教師教育の教材につきましては、大学の教員養成の先生が現場

のことを学生に教えるのに、やっぱり映像が非常に役に立つわけですね。従いまして、最初に作りました「教育実習生の日々」という番組は、全国の教育実習担当の教官のグループにお願いしまして、そこでその先生方のお知恵を借りて、教育実習の番組を作る。試作品を見てもらっては意見を聞いて直し、それを各大学で持ち帰って、大学生に見せて、意見を聞いてまた作り直すというような、大変手のこんだ作り方をしておりました。

4．紀要・報告時代

その後、最近の7、8年ぐらいが、いわゆる紀要時代でございます。紀要が出版されましたし、報告書が出版されまして、非常に多数の研究論文が出た時代でございますが、これは皆様方の記憶にも新しいことでありますので、駆け足でご紹介するにとどめさせていただきたいと思いますが、ビデオお願いいたします。もうそろそろ通信衛星を使った研究が始まってきております。それと、前の加藤所長のお話も聞かせていただけることになっておりますが、紀要につきましては、七つの研究室が途中で三つの研究室に。この間に研究紀要が15冊と報告書がなんと103冊、ワーキングペーパー23冊というふうに、大変積極的な研究公表活動があったわけでございます。研究室も、最初七つの研究室でしたのが、三つの研究室に集約されまして、それぞれ、遠隔教育であるとか、高等教育であるとか、メディアであるとかの研究を盛んにやっておりました。放送教育開発センターの最後の年には皆さんご存知の、「スペース・コラボレーション・システム」を文部省のお力で作ることができまして、全国の大学間の授業の交流のお手伝いをさせていただくということになったわけでございます。こうした諸先輩方が優れた研究を数々積み上げて下さっておりました。

5．メディア教育開発センターへの飛翔

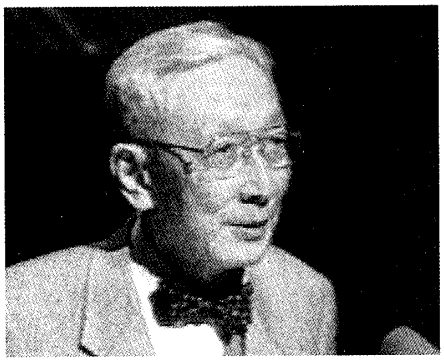
そういう条件がありましたところに、文部省の方で「マルチメディア懇」と私どもはいっておりますが、マルチメディアを高等教育にどういうふうに有効活用したらいいかという懇談会ができまして、これからの日本の高等教育にとっては、マルチメディアの活用が不可欠であるぞということと、もう一つは、私どもの放送教育開発センターの性格が、放送大学の設立発展・全国化のためのお手伝い等をするという使命がございましたが、その放送大学がちょうど、今年の1月からでございますが、CSで全国放送をする。放送大学が完成にもう一歩近づいたという形の状況等がございました。その中で、高等教育におけるマルチメディアを推進する懇談会の中で、放送教育開発センターが高等教育のマルチメディア活用に対する基礎的な研究をたくさん積み上げているから、それを担当する中枢機関として適切であるというようなお話をいただきまして、今日、ここに、いろいろお見え下さっていらっしゃるご関係の方々、それから文部省、大蔵省、いろいろな方々のお力添えを得て、放送教育開発センターがその使命を全うして、メディア教育開発センターに飛躍をするということになったわけでございます。

これまでたゆまなくご指導、ご声援を下さいました放送教育開発センター、それからメディア教育開発センター時代の評議員、運営評議員の皆様方、それから定員、人員関係とか、予算などで大変な力強いご支援を下さいました行政関係の皆様方、歴代の所長の方々、それから一緒に働きました多くの先輩の研究者の方、客員研究員の皆さん方、共同研究者の方、研究協力

員の方々、いろいろな方々のお力添えがいただけていたわけでございます。それと事務官の方々、関係者の方々に、この20周年の機会に厚く御礼を申し上げたいと存じます。どうもありがとうございました。どうか、今後とも、新しく誕生したメディア教育開発センターを、放送教育開発センターと同様に暖かくご支援下さいますように宜しくお願い申し上げます。大変がさつでございましたけれども、20年、ちょっと前史が入り前の方に少し重点を置きました研究の流れの紹介をさせていただきました。どうもご静聴ありがとうございました。

永岡（司会）：ありがとうございました。まだ、少し時間がございますね。何かお話ございますか。

坂元：今お話した前史の頃、あと、3、4分はあるかと思いますので、木田先生、大変突然でご迷惑かと存じますが、裏話として何か一言お話いただけるようなことでもございましたなら。突然で恐縮でございますがお話いただければと。ありがとうございます。



木　田　　宏
新国立劇場運営財団理事長

木田：ご紹介いただきました木田でございます。実は、その前史の方をちょっと補足させていただきますが、昭和41年に私が社会教育局を担当することになりました。その時に、教育放送分科会というのが社会教育審議会の中にございました。それはどういうものかというと、戦後始まったテレビや放送を学校でどういうふうに使うかという、利用者の側の意見だったんですね。私は、それも結構なんだけれども、郵政省の電波管理局長、浅野さんという人のお話もございましたし、既に一部で、千葉の高等学校、あるいは長岡市の教育委員会が実験局を使っていると。それから、今日、お見えになっております東海大学の松前先生のところが、やはり短波放送で放送を出していらっしゃる。だから、放送教育というのは、出す方のことを考えなければならんなというふうに考えまして、社会教育審議会にFMの波、UHの波が広く開放される時に、使う側としての大学を考えたいという諮問を始めたのでございます。それが冒頭に映し出されました社会教育審議会の、昭和44年、3年でございますか、の答申になって出ました。それは個々の教育施設が自分で教育内容を地域に発信する、学生たちに対しても発信する、教室へ集まって来いといわなくてもいいようにしようという趣旨のスタートだったわけでございます。なかなかこれは、今日お集まりのような、リストを見ますとびっくりするぐらいでございますけれども、全国の大学や教育機関に呼びかけましても、教育機関が自分で発信をするということはなかなかご理解がいただけなくて、せっかく電波を、教育関係にと郵政省がいって下さったんですけども、それが上手に行きませんでした。しかし、こうして皆さんのその後の努力によりまして、放送大学ができ、開発センターもメディア教育開発センターになり、今のような、約30年近い間にそれぞれの関係の方のお骨折りによってすばらしいものになってきている。そして、坂元所長の挨拶、いつも感心するんですけれども、私どもはこうやってしゃべる一方なんです。坂元先生のは、毎回、ビジュアライズされて、メディアを使った話をなさる。これがもう一つ日本では特別の先生以外に上手に行きませんね。シンポジウムをやっても、

首から上だけ映るような発信になるんですが、そこはこれからの、皆さんのご努力によって、皆さんが上手にメディアをお使いになるだろうと。メディアを使う教育、そういう方向に力を入れていただければ大変ありがたいなと思っておる次第でございます。今日は機会を与えていただきましてありがとうございました。

坂元：どうも、木田先生ありがとうございました。突然、ご指名申し上げて失礼いたしました。

永岡（司会）：飛び入りが入ったりすることがこういうことのいいところでございます。今の坂元先生のお話の中にもありましたように、本シンポジウムはSCS、スペース・コラボレーション・システムを用いまして、全国の18大学、機関に衛星通信により、双方向、同時中継しております。また、インターネットにより配信もしております。全世界にインターネット着信していただければ、本シンポジウムの状況が見ることができるという状態になっております。それでは、次の基調講演に移りたいと思います。「マルチメディアの発展が21世紀の高等教育を創る」というふうに題しまして、慶応義塾大学大学院政策メディア研究科教授、石井威望先生のご講演でございます。先生は先頃の文部省と郵政省の「教育分野におけるインターネットの利用促進に関する懇談会」の座長も務めていらっしゃいます。それでは石井先生、どうぞ宜しくお願い申し上げます。